



裏表紙に 2022 年度の募金取り組みのご報告を掲載しています。

2022年度に実施しました様々な募金に、たくさんのお気持ちをいただきました。その中でも、2023年2月6日に発災しましたトルコ・シリア地震に合わせた緊急募金では、多くの寄付をいただき、その中から、垂水区（第5地区内）を活動場所にされている（社）国際支縁機構に寄贈させていただきました。わたしたちのすぐ近くでシリアの国際援助をされている団体がいることやシリアの災害状況や困難な生活状況を多くの方々に知っていただきたく、（社）神戸国際支縁機構国際部 佐々木美和さまにシリアでの活動をご報告いただきました。



(左) 河端理事 (右) 佐々木美和さん

戦渦で小さくさせられたシリアの孤児たちにホームを (社)神戸国際支縁機構

小さなはたらき、たったひとりでも：第5次シリア・ボランティア

(社)神戸国際支縁機構国際部「カヨ子基金」代表 佐々木美和

コープこうべから、毎月の被災地訪問や毎週の炊き出しへ物資支援をいただいています。そのご縁で、今年8月7日から17日までシリアへボランティアに行くことをお伝えしたところ、今回のシリア・トルコ緊急募金から寛大なご献金で応援していただくこととなりました。コープ会員の皆さまからコープこうべに集まった浄財です。涙が出ました。温かいご献金を、戦渦の中で親を亡くした子どもたちのために用います。

(社)神戸国際支縁機構 (KISO) とは・

2001年9.11テロを機に発足。神戸の一市民である岩村義雄氏により立ち上げられた。困窮者、難民、シングルマザー、孤児、独居の高齢者に上からの「支援」でなく横から寄り添う「支縁」を目指しています。

国際部「カヨ子基金」は2016年に誕生。岩村氏の配偶者カヨ子さんが亡くなったことをきっかけとしています。毎月3000円の教育費支縁を日本在住の里親から海外の被災地の孤児たちに届けています。

日本の被災地、戦場、僻地の現場で、「しゃべくりより、現場での実践」をたいせつにする働きに、私は2019年に加えていただきました。神戸国際支縁機構に6年前に出会い、「ボランティア」のはたらきを通じて、私は変わりました。天候、寒暖、睡眠不足などおかまいなし、痛み、苦しみ、怒り、くやしさを持つ「ひと」にぶつかっていく素朴な活動です。2001年の9・11テロ以降、難民支縁ではじまったはたらきです。20年近く、近隣、社会、地域では無名なゲリラのような存在だった神戸の群れです。仲間は統合失調症、ハンディキャップ、路上生活者などエリートでない人たちが中心です。そこでは、学歴、資格、



「田・山・湾の復活」を目指し被災地の園児たちと無農薬有機の冬水田んぼの世話をする 2019年5月24日

ジェンダーに関係なく、^{くわくわ}鋤を握り、ひたすら何時間も土と格闘します。10分もたたないうちに汗が噴き出ます。近くにコンビニ、トイレ、休憩場所がありません。だれも文句も言わず、黙々と10年近く土に喜びを見出す中に飛び込みました。正直言って、不馴れな土方作業のような農耕に、内心、「これはやっていけないわ」と気が遠くなったこともしばしばです。すでに機構の毎月の東北ボランティアは146回を超えます。ほぼ毎回、コープこうべからのお米、お惣菜、飲料水などの支援物資が寄せられています。被災地で独居の高齢者や子どもを持つシングルマザーのかたなどにお配りしています。

現在、イスラエル・パレスチナ問題が勃発しています。私たちが訪問していたシリアのアレッポも、このたびの紛争以降、新たにイスラエルから空爆を受けています。今年2月に起きたトルコ・シリア地震のため、8月にシリアを訪問しました。孤児の施設を建造することが主要な目的です。シリア全土のうちアレッポ、イドリブ、ハマとラタキアは最も甚大な被害を受け、全体で56,000人が影響を受けたとされます。アレッポでは、現推定人口3万～4万人のうち約半数の2万人が被災し、アレッポの倒壊数は町の70～80パーセントと述べる住民もいます（2023年8月11日、12日、13日現地聞き取り）。震災後、最も支援が必要な時期でもシリアへの制裁は継続しました。救援物資も、なにも、庶民には届きませんでした。「なんのための制裁なの？（シリアの）政府のため？苦しんでいるのは普通の人びとなのに」と無差別の制裁に苦しむアレッポ市民たちの怒りを現地で聞きました。



アレッポ市内中心部のアパート。シリアの孤児の家の責任者バヘード夫人の友人マルナ・テネケジャン(50)が一人息子アルバート・テネケジャン(13)とともに犠牲になった。

シリアの国土には「イスラム国」(IS)などイスラム過激派組織、イスラエル、米国、ロシアなどからの空爆跡も残ったままです。そこに、今年地震の被害が加わりました。アレッポ生まれ育ちの20代の若者が述べた言葉が、忘れられません。

”Syria, who cares?” 「シリアのことなんて、いったい誰が気にかけるかしら・・・。」

西側諸国が抑え込もうとする「テロ」「イスラム勢力」とは何でしょうか。ある特定の場所に住んでいたなら、人間ではなくテロリストなのでしょうか。シリアのひとびとを抑圧しているのは誰でしょうか。私たちは、たとえ現場にいなかったとしても、無知・無関心による抑圧を加えているのかもしれない。

シリア難民の孤児、ラハブさん(12)と出会いました。自分の兄弟だけでなく、近隣も含め年下の子どもたちを気にかけて、いさかいをおさめ思いやりをもち、世話をし、家族のために農場で賃金を得ていました。戦争、テロ、大地震の三重苦にのたうちまわっている人びとの生きていく道は閉ざされています。今後も神戸国際支縁機構および「カヨ子基金」は、現地で仕えます。70パーセントが破壊されたシリア国第2の都市アレッポに孤児の施設を建てるため、引き続きご支縁をお願い申し上げます。



幼い兄弟たちのため、学校へ行かず農場で一日2ドルを稼ぐシリア難民の心優しい少女ラハブさん(12)と抱擁する筆者(右)
2023年8月16日 エリヤズ 015 難民キャンプ